

発達障がい児の運動指導に携わる ボランティアの養成

特定非営利活動法人 スマイルクラブ
〒277-0858 千葉県柏市豊上町 23-29

助成事業の概要

<目的>発達障がい児も参加出来る運動教室「運動が苦手な子の教室」は、2001 年より始め、今では千葉県柏市のみならず、松戸市・船橋市・印西市、そして茨城県や神奈川県、熊本県にまで広がっています。教室ではじっとして並んでられない子、奇声を発し走り回っている子、他の子どもたちの声が気になって落ち着かない子など、様々な子がいるため、多くの人のサポートが必要で指導ボランティアの活躍が不可欠です。そこで近隣の大学生や高校生たちにこの教室の事を知ってもらい、将来的に教室を担ってもらえるボランティアの養成をおこないたいと考えています。

<時期・内容>

講習会 A) 2016 年 7 月 18 日 CPR&AED 講習会実施。

活動 A) 2016 年 7 月 29 日・30 日 「運動が苦手な子の教室」 プール教室

活動 B) 2016 年 11 月 23 日 風船バレー大会

活動 C) 2016 年 10 月 10 日 ボウリング大会

活動 D) 2016 年 5 月 8 日 「運動が苦手な子の教室」 スポーツ大会イベント

※予定では 11 月だったが、ボランティアの集まり具合を考え 5 月に実施。

活動 E) 通年 「運動が苦手な子の教室」にてボランティア

2017 年 3 月 9 日・24 日 ボランティア体験発表会の実施

事業の成果

1. 魅力あるボランティア養成事業のノウハウの構築

今回、本事業を実施したことで、本部のある千葉県のみならず、水戸支部でのボランティア養成が出来たことが大きな成果である。この事業を通して、千葉県で延べ 25 名、茨城県では茨城大学の学生を中心に延べ 92 名、合計 117 名のボランティア参加があった。

2. 同じ志のある学生同士の交流の場の提供

複数の大学や高校から学生がボランティア参加し、開始前や終了後のミーティングでの情報交換を通じて、高校生同士や大学生同士、高校生と大学生との交流が深まった。

3. 障がい者理解の促進

参加者のうち、6 名が初参加であったが、終了後の総括ミーティングでは、「子どもたちが開始前に勝手に動き回っていて、どう対応してよいか判らなかったが、時間とともに徐々に運動を楽しむようになった」「運動を楽しんでいるところは健常者の子どもとあまり変わらない」など、発達障がい児とのスポーツ交流を通して、障がい者への理解向上ができた。

4. 発達障がい児（者）への支援の充実

また、参加した子どもの中には運動をあまり経験していない子どももおり、ボランティアと一緒に様々なスポーツを楽しみ、観戦していた父兄から「子どもが来年もまた参加したい」、「初対面なのにボランティアの人とハイタッチできるのは驚き」などの感想を頂戴し、イベント

に参加した障がい児が、他者とのコミュニケーション能力の向上につながったことは明白である。

5. 東京オリンピック・パラリンピックでのボランティアとしての活躍

今後もボランティア育成を継続することで、東京パラリンピックでのボランティアとしての活躍も期待される。

■ 成果の広報、公表

活動の終了ごとに、スマイルクラブのホームページや Facebook で実施結果を公表した。特に Facebook では参加者が積極的に「いいね」を押し、友人に向けてその記事をシェアしてくれるなど、活動をインターネット上で拡散してくれたことで、本事業を目にした人は参加者の2～3倍に達している。

さらに Facebook を見た人が、その後の活動にボランティア参加してくれたことも10名程度存在し、広報の観点からも成果を上げたと確信している。

またボランティア体験発表会でボランティアの皆さんが感じたことを発表し、交流する場を設けたことにより、単一の活動にしか参加しなかったボランティアが他の活動での体験を相互間で共有することができ、参加者からは大変好評であった。同時にスマイルクラブのスタッフも、子どもたちとの関わり方や指導者の目線からでは気付かなかったことなど、たくさんのことを学ぶ良い機会となった。

■ 今後の展開

今回のイベントや講習会に参加してくださったボランティアの方や、参加児童との繋がりを活かして2017年度のイベント案内や教室案内等を配

信し、ボランティア養成や発達障がい児への支援を継続していきたいと考えている。活動内容については、これまでの水泳に加えて今回は風船バレーとボウリングという種目を取り入れてみたが、参加した児童もボランティアと一緒に楽しんでいたため、プログラムとして今後も継続していく方針である。

改善点としては、①野球観戦など子どもたちや保護者から要望が多かったプログラムの検討に加え、②終了後の感想発表の時間を多くとることによって、それぞれの参加者が感じた「障がい児(者)が運動することの困難さ」をより自分事として感じていただき、障がい児(者)への理解を深め、2020年の東京パラリンピックへのボランティア参加というムーブメントを継続していきたい。